The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	同情を誘う悪女 ： 『石言遺響』万字前に注目して
Author(s)	池田, 真紀子
Citation	語文. 2024, 123, p. 14-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100241
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

同情を誘う悪女

――『石言遺響』万字前に注目して――

池田　真紀子

一　異質な悪女像

文化年間初頭の後期読本は、仇討を重要なあらすじとする作品が多い。特に曲亭馬琴の作品では、登場人物の善と悪の性質を示す記述が見られ、因果応報のあらすじを主として物語が展開する傾向がある。悪人に害された善人たちは悪を討って繁栄し、悪人はその悪事に見合った最期を迎えるとされる。(1)

『石言遺響』（文化二年（一八〇五）刊）は、前述した作品群に位置づけられる。だが、仏教長編説話『小夜中山霊鐘記』（寛延元年（一七四八）刊）以下、『霊鐘記』）という同時期の作品群に見られなかった題材を主な典拠としており、(2)そのためか、作者の以前の作品に比べて、異質な悪人が登場する。

本作冒頭では、藤原宗行と日野俊基の怨霊が、それぞれの「宿怨」を晴らそうと、「禽獣に生をかへ里人を悩し」「女人に生を引。障礙をなさん」と談合し、姿を消す。以降の本文では、「蛇身鳥」となった俊基の怪異と、それを討伐する日野良政が登場し、恩賜の女人万字前が怨霊の影響と見られる騒動を起こす。本作全体の構成では、俊基の娘である月小夜の縁者が、万字前とその夫である隈高業右衛門に害される。仇討が行われ、その後に日野俊基を供養する鐘が建立され、物語は終わる。

本作には、登場人物がもつ善悪の性質が明瞭に区別できない記述が見られる。万字前に関する文脈には、生来悪人の性質を持つとされながらも、当初は善良な振舞いをし、怨霊の影響によって悪事を重ねていったと読める記述がある。馬琴の本作以前の作品(3)に登場する悪人は、悪人としての出自や性質をもち、常に悪事を企む。倫理観の欠如や残虐性なども端的に示され、その行いに見合った最期を遂げる。つまり、悪人はひたすら悪に徹するものとして描かれていた。

そうした人物たちと比較すると、万字前には内面の苦しみを描いた記述が多く、死の間際には改心して、反省の弁を述べる。加

えて、死後は元夫の良政の家臣によって、主君の元妻として火葬される。上記の点を踏まえると、本作の万字前は、作者のそれまでに描かれた悪人像と大きく異なる。読者の同情を誘うかのような人物として描かれているのである。

本稿では、異質な悪人像と考えられる万字前に焦点をあて、先行研究で深く考察されなかった、実子への執着心や亡父の仇討といった観点に着目し、本文全体から人物造形を明らかにする。加えて、本作以前の作品に見られた悪女像とも比較し、その特異性を明らかにする。[4]

二　万字前と万寿ノ前

万字前は、夫の寵愛をめぐって、善良な月小夜に嫉妬して迫害する人物である。万字前の性質や悪行、行動の契機となる事象について、典拠の内容も含めて確認する。[5]

『石言遺響』冒頭の怨霊たちの談合については、後述するとして、先に万字前・月小夜・良政の出会いから考察していく。万字前は、蛇身鳥討伐の褒美に「宿の妻」として良政に下賜されるが、既に月小夜との婚姻の約束があった。良政は勅命を断れず万字前を妻とし、やがて月小夜とも婚姻する。二人の妻はともに美しく、当初は互いに正妻の座を譲りあい、良政は「いづれを正妻いづれを傍妻とも定めがたく」思い、二人の立場に差がない状態を維持する。ところが、万字前は生来「こゝろ直ならず」「假に言を飾り。おのれをまげて」という性質をもち、先に二児を産んだ月小夜が「おのづから人のおもひよせ多て時めき」という様子を見て、嫉妬を覚える（第五編）。

典拠の『霊鐘記』では、この箇所の設定がやや違う。良政には、先に正妻の万寿ノ前と娘の香首姫がいた。月小夜が屋敷にやってくると、万寿ノ前は歓迎するが、直後から良政が月小夜ばかりと行動するようになり、万寿ノ前は蔑ろにされる。『石言遺響』の万字前と同様に、「疾妬ノ心ハ毒蛇ノ如シト、外面ハ菩薩ノ如ニシテ、内心ハ夜叉ノ如シ。」として、万寿ノ前は内心を偽る。そして、このまま月小夜が懐妊すれば、我身がどのように扱われるのかと考え、やがて月小夜との溝が生じる。本文には注が挿入され、「一説ニ万寿ノ前兼日ヨリ総シテ疾妬ノ心深ク故ニ良政卿ニモ悪思召ケリト」とある（巻之二）。

ここで、良政の関心が月小夜に集中するのには、明確な理由がある。良政と出会う前、月小夜は琴の秘法を学ぼうとして、高道仙人を訪ねる。仙人は月小夜の姿を見ると、あまりの美しさにひどく警戒し、一瞬通力を失いかける。良政との出会いにおいても、月小夜の美しさが描写される。万寿ノ前と月小夜の容姿について、本文で直接的に対比されるわけではないが、良政は月小夜の美貌に魅了されたと読める。[6]

『霊鐘記』の万寿ノ前は、生来嫉妬深いとされながらも、月小夜がやってくる以前に悪事をなしたわけではない。正妻と側室という立場の差も、夫の関心を取り戻せない万寿ノ前の焦りと嫉妬心を強調している。田中則雄は、こうした万寿ノ前の姿を「敗北者

挫折者」と位置付ける。[7]『石言遺響』の万字前は、素直でなく内面を隠す人物とされるが、万寿ノ前と同様に、本人の性格がそのまま悪事に結び付くわけではない。万字前と月小夜の立場は対等であり、表面上は妻同士の諍いもない。万字前の嫉妬は、月小夜の子どもの誕生によって生じたものと解される。

次に月小夜が呪われる場面に注目する。『石言遺響』では、月小夜を憎む万字前の感情が徐々に強まっていく。ある日、月小夜は夢の中で、万字前が「木舩明神」で「丑の時参」をする様子を見る。そこでの万字前は、「おのれつきさや。殿のこ、ろを蕩して。人もなげなるたち挙止。われは児だねも石女の。あるにかひなきこのとし月。恋慕の仇。この身まつ讐。ころさでやはおくべき」と、ひどく泣く。この後、嫉妬と憎悪を抱いた万字前が奸計を弄するが、月小夜母子は家臣の助けで落ちのびる（第四編）。

『霊鐘記』における同様の場面は以下の通りである。万寿ノ前の嫉妬はしだいに激しさを増し、良政と月小夜の寝所に轆轤首の姿で現れ、月小夜を奸計に陥れる。しかし、悪事が露見すると、娘の香首姫を残して逃走する。逃げた万寿ノ前は、頼る人もなく極貧の生活を送り、己の境遇と月小夜への憎しみに狂っていく。そうして、「丑ノ時参リ」の場面に繋がる。万寿ノ前は「春日大明神ノ若宮」で呪いの儀式を行い、月小夜は奇病に倒れて「七転八倒」して苦しむ。陰陽師の占いで「瞋恚ノ焔」による病苦と判明し、万寿ノ前の呪いの影響であると暗示されている。そして、呪いが成就する日を迎え、万寿ノ前は、「己レ能モ此面ヲ以テ、良政卿ノ心ヲ融カシ、斯迄我ニ憂目ヲサセ、比翼連理ト云通シタル其中ヲ、情ナクモ踈ナシヌ。（中略）恋慕ノ敵、我身ノ怨。思知セン思知」と、泣き喚く（巻之三）。

こうして細部を比較すると、『霊鐘記』の万寿ノ前は、夫の愛情を奪われたことで憎しみの念が生じ、それが悪事の源動力となっている。しかし、『石言遺響』の万字前は、月小夜が子どもを二人も生んだことで嫉妬心を抱き、自身が「石女」であることに劣等感を感じている。

『石言遺響』では、月小夜母子が姿を隠した後、万字前は悪の道に転落していくが、この箇所は『霊鐘記』に見えず、典拠は未詳である。万字前は、「ます〳〵功言をもて夫を欺き。己に諛ふものは忠なきをも賞し。おのれに逆ふものは忠有をも罰し。」というように、振る舞いが大胆になる。しかし、長谷観音から帰る途中で急病に倒れ、過去の悪事が露見し、良政の屋敷から逃走する。途中で隈高業右衛門に助けられ夫婦となるが、業右衛門は「兇勇の剛弼」で山賊を生業としていた。夫の行いに悩んだ先妻は病死し、一子八五郎も父の行いに泣き続けて盲目となっていた。万字前は夫の本性を知っても恥じることなく、山賊の妻「鼈」[8]と改名し、むしろ夫を叱咤激励するようになる（第六編）。こうして、万字前は、月小夜迫害から行動範囲を広げていき、悪人としての残虐さも増していく。

また、万字前は四〇歳近い年齢で、業右衛門との間に待望の実子をもうける。万字前はこの女児を枝折と名付けて溺愛し、継子

の八五郎を虐待する。八五郎が父を諫めようとその矢を受けて亡くなり、業右衛門は呆然として数日間自宅に籠る。万字前はそれを見て、八五郎に自身と娘を思いかえて養えと急き立てる。業右衛門の反応は「聞もうるさくて」とあり、万字前との間に心理的な距離感が生じ始める。悪心が再び生じた業右衛門は、通りすがりの妊婦（月小夜の娘である小石）を殺し、仏像を奪って帰宅するが、万字前は死体から追剥をしなかったことを責める。業右衛門は、強欲すぎる妻を「膽ふとき女」「不敵の女」だと考え、禍の元凶となることを恐れて出奔する（第六編～第八編）。このように、万字前はいっそう悪人らしく振舞い、「兇勇の剛者」である夫からも恐れられるほど、極悪ぶりを発揮するようになる。

さて、万字前と万寿ノ前は、この後どのような結末を迎えるのか。先に、『霊鐘記』の内容を確認する。前述した呪いの儀式の場において、高徳の老僧が、狂乱する万寿ノ前を発見する。老僧は「嫉妬ノ念力」に驚きつつも、万寿ノ前を教化して正気に戻そうとする。万寿ノ前は、やがて自ら念佛を唱え、「身意柔軟」になる。その上で、「熟思ヒ合スレバ、人ノ悪ハナキモノヲ、我悪ヨリ人ヲ嫉ト心付、悪シ苦シノ心ハ去テ、自業自得ノ罪ヲ懺悔」して、尼となる（巻之三）。前述した他の箇所も踏まえて考えると、万寿ノ前の悪事は、一貫して夫の寵愛を奪われたことによる怒りや悲しみに基づいていた。

対する、『石言遺響』ではどうか。万字前の最期には春木伝内が遭遇する。伝内は良政の臣下であり、月小夜母子を逃がして、子らを養った。伝内が妻の小石の仇を追う道中、「柏原の孤館」で落とし穴に、宿の女児が落ちて死んでいるのを見つける。宿の主は万字前であり、旅人が女児を殺したと怒り狂う。そこに伝内が現れ、万字前を主君良政の元妻と見破り、これまでの経緯を説明する。万字前は突然自害を試み、自身の出自や親の遺恨、実子への執着心に基づいた悪事の動機を語り、懺悔して息絶える（第十編）。

本作全体のあらすじを踏まえると、万字前が零落する様子に連動して、その凶悪さが増していく過程が、段階をおってかなり丁寧に描かれていることがわかる。久方ぶりに万字前を見た伝内が、「この婦人。積悪発覚て斯零落し。この暴悪をなすにこそ。世におそるべき女なりけれ」と、その凶悪さの極まりに驚く記述もある。『霊鐘記』と比較すると、『石言遺響』の万字前は、単純な嫉妬心からではなく、複雑な心情に基づいていて行動していた。

三　悪事の動機と実子への執着

『石言遺響』と典拠の比較を踏まえ、万字前が悪事を重ねた要因を考える。本文冒頭では、藤原宗行の「女人に生を引。障礙をなさん」という言葉が提示されるが、これ以降の本文で宗行は登場せず、厄災が引き起こされる場面で明確に怨霊の影響が描かれるわけではない。「生を引」という表現は、『太平記』[9]や演劇作品[10]にも見え、「生まれかわる」の意と考えるのが自然だが、本文の時系列からして、怨霊たちの談合の直後に蛇身鳥が現れるようになり、その討伐の功で良政に万字前が下賜されている。宗行が万字前に

生まれ変わったという設定とは考えにくい。本作全体の内容を踏まえると、「女人に影響を与え、何らかの災いをなす」といった意で解釈すべきだろう。万字前は、宗行の怨霊の影響を受け、悪事を重ねていったということになる。[11]

万字前が自害する場面には、悪人らしい出自と悪事の動機が示されている。万字前は、鹽飽三郎勝重の娘で、「生れし年丙午のおなじ月日。しかも午の尅の日蝕」という不吉な出生から周囲に忌み嫌われる。両親は万字前を捨てはしなかったが、やがて政争が起き、父勝重が月小夜の父俊基に討たれる。万字前は一旦零落した後、宮中に召されて良政に下賜される。月小夜が現れると、「旧怨さらに弥まして」、仇の娘を討とうと考えた。しかし、そうした過去を筋違いの怨みによるものとし、山賊としての悪行も含めて「悪報遂にまぬかれず。わが児を殺す天罰に。三十年の非をしりぬ。」と述懐する。万字前が死ぬと、伝内は「万字前暴悪なりといへども。主君の前妻なり。われ家隷の身にしあれば。その死後の恥をかくさずばあるべからず」と考え、館を焼き払い、母子の死骸を火葬する。

馬琴の読本作品における悪女像の類型を考察した中尾和昇は、次のように述べる。[12]

たとえ、「旧怨」を感じていたとしても、それが彼女の「直ならざる」性格、すなわち悪性を決定づける要因にはなっていない。そうではなく、「怨霊憑依」という外的要因によって、万字前という悪女が形作られるのである。

仏教長編説話と読本の関連性を論じた田中則雄は、人物造形の特徴から、万字前に対する作者の意識を指摘する。

彼女は出奔して強盗の妻となり極悪の道へと転落し滅んで行くのであり、『霊鐘記』の万寿ノ前の如き救いを与えられることはない。（中略）善と悪の対立という構図の中、彼女は終始悪の側に、しかも生来の悪人として位置づけられている。馬琴が示そうとしたのは、人間の善心悪心、善行悪行の底部に、人力では如何ともなし難い宿縁が大きく存在しているということであったと解される。[13]

中尾論は、宗行の「怨霊憑依」が万字前の悪女化の原因とし、悪事に本人の出自や性質が直接結びつくわけではないとした。しかし、田中論では、万字前を生来の悪人と位置づけ、人力を超越する宿怨によって、悪の道に零落すると述べる。

このように、両者の論では万字前の性質と悪事に手を染める過程、作中での位置づけをめぐって意見が分かれている。ここで、改めて万字前の情報を整理する。

○　出自　→　不吉な生まれ・父親は月小夜の父に討たれる
○　性格　→　素直ではない・言葉を偽り本心を隠す
○　悪事の動機　→　月小夜の出産・自身の不妊
　　月小夜への旧怨・業右衛門との野合
　　実子への執着

加えて、作品構成の面から見ると、万字前の位置づけはどのようになるだろうか。月小夜の縁者は、月小夜の父親である俊基を

供養するため、鐘建立を悲願としており、月小夜・娘の小石・息子の幸樹丸・小石の夫春木伝内がそれぞれ尽力する。万字前の方は、宗行の怨霊の影響を受け、万字前自身が月小夜母子を迫害し、業右衛門は妊婦の小石を惨殺する。このように、俊基は月小夜の縁者に影響を与え、宗行は万字前の縁者に影響を与えるという、作中での二つの大きな展開が並列し、物語が進行している。その点については、大高洋司も指摘しており、「実際、『石言遺響』の文芸的内実の中核部分をなしているのは、日野三位良政をめぐる万字前と月小夜との葛藤なのである。」[14]とする。

そうしたことを踏まえると、本文のあらすじは次のように整理することができる。

○　俊基の怨霊　→　月小夜・小石・幸樹丸・春木伝内
　　…　鐘供養・小石の仇討
○　宗行の怨霊　→　万字前・業右衛門
　　…　月小夜親子への加害

万字前に関する文脈が作品を構成する大きなあらすじの一つであったとすれば、その展開の軸になるのが、実子への執着である。月小夜への嫉妬と迫害は、仇の娘に先を越されたという憎しみと同時に、自身に子がいないことにも起因していた。業右衛門との間に生まれた枝折に関しては、溺愛の様子が散見され、夫を圧倒するほどに略奪行為を催促したのも、「女児(むすめ)によき衣被(きんき)せ。心のまゝに育(そだて)ん」という理由からであった。そして、山賊の夫が失踪し、旅人を自ら手にかけるほど悪心が極まっても、旅人に向けて仕掛けた罠で娘が死んだと知ると、己の悪報を悟って自害した（第十編）。このように万字前の行動は、実子への執着心と強く連動していることがわかる。[16]

万字前には、悪人になることを運命づける生い立ちや、悪心を抱きやすい性格、度重なる悪事という、いかにも悪人らしい特徴が揃っている。しかし、本作全体を通して、実子を欲して溺愛する側面を多分に見せていることも事実である。嫉妬で恋敵を害し、山賊に与して継子を虐待する悪女であっても、怨霊の影響や本人の境遇、実子への執着という要素を含ませることで、同情を誘うような描かれ方がなされていると考えられる。

四　馬琴作品における悪女

作者の作品群において、万字前はどのように位置づけられるだろうか。馬琴の後期読本には、様々な造形の悪女が登場する。『石言遺響』以前の例を確認してみる。

先に半紙本読本の例を挙げる。『月氷奇縁(げつひようきえん)』の「漣漪(さゝなみ)」は、冤罪で死亡した腰元で、怨霊となって怪異をなし、元主人一家に禍をなす。[17]『稚枝鳩(わかえのはと)』の「専(おさめ)」は、素行が悪い自身の連れ子を追い出され、これを恨んで夫と継子たちを害そうとする。「茶挽の長」は、金で買収され、未亡人の息津に悪人との婚姻を勧める。[18]

次に中本型読本の例も挙げる。[19]『高尾舩字文(たかをせんじもん)』では、女中の「沖の井」が悪人と協力し、主君の妻萩の方に不貞の濡衣を着せ、萩の方は自害する。また、遊女の「高尾」には本命の相手がいたが、

高尾の母「もみじ婆」が、貴人に娘をしつこく勧める。高尾は貴人の密書を盗み、争った末に切り殺される。[20]

先行した悪女像から、万字前と類似する例を取り上げて比較する。実子を溺愛して継子を虐げる例として、『稚枝鳩』に登場する「専」[21]が挙げられる。この人物は、作中で善人たちの縁者であるが、「こゝろよからぬ」性質で、実子の殖栗弾八・字九郎兄弟は悪事を繰り返す。専の夫余綾福六が兄弟を追い出すと、専はこれを恨んで福六の連れ子たちを虐げる。しかし、密通相手の道玄とともに、追い出された実子と奸計を弄する。やがて、夫と継子たちの毒殺を試みるが、計画に使う毒石を誤って食し、「七転八起して狂ひ死にぞ死たりける。自業自得。隠慝の悪報。おそろしといふもおろかなり。」という有様で、夫とともに変死する。福六・専夫妻の葬式では、火叉の妖怪が死体を運び去ろうとするが、福六の連れ子呉松と高僧の龍澤和尚によって退治される。[22]

専は実子と共に悪事を働き、因果応報の最期を迎える。悪事をなす背景が詳述されるわけではなく、強い遺恨が関わるような複雑な動機もない。死後には妖怪に死体を喰われかけ、悪人として悲惨な報いを受ける。

他方、子どもに関わる悪事という観点で見れば、『高尾船字文』の「もみじ婆」が想起される。もみじ婆は、「巧言を以て頼かねをすかし。おのれら親子か口をぬらさん」と考え、本命の相手がいる娘の高尾を、強引に貴人の頼兼に沿わせようとする。高尾は頼兼の密書を奪い、本命の男と自身の生活を保障するよう迫るが、激怒した頼兼に切り捨てられる。もみじ婆は娘が手打ちにされたにも関わらず、頼兼の前では殊勝に振舞う。だが、突如大群の兵が押し寄せ、「察する所高尾が母。娘が仇を報ぜんと。鬼貫仁木へ手引なし。我を引込むはかりこと。」と疑われ、川に落とされたところを、小舟で逃走する。

もみじ婆は、実子が不利な状況に置かれぬように注力し、娘の死後は仇に報復をなそうとしたと解される。だが、別の相手がいる娘に対して、金銭的上の目的で無理に頼兼を勧めている。専と比較すると、もみじ婆は、親子間で情報を十分に共有せず、自身の欲望を優先して娘の意思は二の次にする。

専ともみじ婆以外に、万字前と類似した人物や子どもに関わる特徴をもった人物像は見当たらない。専ともみじ婆自体も、万字前と共通点はあるが、作品全体を通して、親の仇討を望む、実子に執着して嫉妬に狂うというように、本人の心情に焦点があてられているわけではない。あくまで悪人同士で与して、内面では悪事の計画ばかり考える人物として描かれている。

五　「忠義」と「私の遺恨」、仇討の正当性

万字前の実子への執着心を論じたが、今一つ考えるべきは、亡父の仇討についてである。

月小夜と万字前の行動のスタンスには、亡父への孝心があったことを考えると、月小夜が亡父の供養で鐘建立を目指すという展開があり、万字前が亡父の仇の子孫を討とうとする展開があると

いうことになる。とすれば、怨霊の影響下にあったとはいえ、万字前の行動の根本は月小夜と共通しており、同様に大義名分があるという見方も考えられるのではないか。

これに関しては、先行研究の見解がわかれる。田中論では、万字前について、「しかしそこから、故に彼女の悪事も子の心情としては無理もなかったなどとの意を読み取ることはできない。」とした[23]。中尾論では、前述で挙げたように「「怨霊憑依」という外的要因」が万字前の悪事の原因であったと述べる[24]。先に考察したように、万字前の悪事の動機には、親子の愛情という尊重されるような一面も含まれていた。作品全体に見られた万字前の悪心の背景に、父への孝心と子への愛があったとすれば、それが報われない万字前は、やや不憫な人物として印象付けられる。月小夜との相克において、万字前には少しも正当性がなかったのだろうか。

そうした疑問に答えを示す記述がある。万字前は今際に人生を振り返り、自らが抱いた月小夜への憎しみを否定する。俊基は「忠義」のために亡父を討ったのであって、俊基本人やその子孫を恨むのは「私の遺恨」であり、筋違いだったとする。万字前の言葉から、「忠義」と「私の遺恨」という対立概念が見えてくるが、こうした認識は別の箇所でも確認できる。

近隣で蛇身鳥（俊基）の騒ぎが起き、月小夜の前に俊基の怨霊が現れる場面があった。俊基は、帝に「忠義」を尽くしたにも関わらず、これが報われないことが無念であった。そのため、蛇身鳥討伐で派遣されてきた良政と月小夜が婚姻することで、月小夜自身が「世に出給ふ」ことを望む。しかし、月小夜は父の仇の妻になることだとして拒絶する。これに対して、俊基は「良政勅諚によりてわれを射こと。私の恨あるにあらず。しからば誰をか仇とせん。」と述べる（第二編）。こうした俊基と月小夜の会話からは、「勅諚」という大義と「私の恨」という私事が対立した場合、いかなる理由があっても、「勅諚」が優先されることを示している。

ちなみに、この箇所は『霊鐘記』にも同様の内容が見え、蛇身鳥となった月小夜の母親が、良政との婚姻を勧めている。月小夜の母親は、良政が「自ノ遺恨」ではなく「万人ノ歎ヲ止ン」として「禁庭」から派遣されているため、自身が討たれても恨むことはないとする（巻之一）。『霊鐘記』の内容を受けての表現と思われるが、『石言遺響』の「忠義」と「私の遺恨」という概念は、万字前の告白にも利用されたのであろう。

『石言遺響』に話を戻す。作中では、公に認められる事象が優先されるのであって、それに関連して生じる個人的な遺恨は、互いの立場や利害が対立した際に、いかなる事情があったとしても考慮されない。そのため、俊基の帝への「忠義」によって父を討たれた万字前が、亡父の仇討を意図したことは否定され、万字前の心情も肯定されないと読めるのである。本作は、物語の終盤で、万字前の内心が全て明かされることで、それまでのあらすじを想起し、万字前の人生に悲壮感を感じる仕組みとなっている。万字前の行動の動機が否定される理由は、作中で見られる倫理観に、大

義と個人的な事情という対立概念が通底しているからであった。

万字前がもっていた仇討の認識について述べたが、今一つ考えるべき点がある。本作の内題は、『繡像復讐石言遺響』[25]である。「繡像復讐」は角書で、「復讐」には「かたきうち」と仮名が付される[26]。作品内容に仇討が関わると示しているわけだが、それは、終盤の春木伝内による妻の小石の仇討を指すと考えられてきた[27]。該当する内容は、以下の通りである。伝内は良政に仕えており、月小夜母子が身を隠す際に母子を保護する役目をおう。しかし、月小夜は父の鐘供養の思いに駆られ、尼となって失踪する。十年後、月小夜は成長した子らと伝内に再会し、伝内と娘の小石を夫婦となし、生涯を終える。しばらくして、伝内が家を空けている間に、隈高業右衛門（万字前の夫）が妊婦の小石を殺害する。伝内は妻の仇を探し、業右衛門を討ち果たす。

こうした小石の死と伝内の仇討は妻仇討にあたるが[28]、元主人の娘とそれに忠義を尽くす家臣という設定によって伝内の正当性が示されることになる[29]。

本作の題と作品構成をめぐって、横山邦治は次のように述べる。

単純な仇討ち話の主題だけに主力が注がれており、そこに無間鐘の伝説や夜泣き石の伝説がからんだ仇討ち話になるのであった（注五[30]）。主題とするところが意識的には仇討ち話であること、内題に繡像復讐石言遺響とあり、柱心にも復讐石言遺響とあるによっても判るけれど、内実伝説ものと称していいほどの萌芽を含んでいるごとくであった。馬琴の仇討ものの行方を暗示しているといってよかったのである[31]。

小石の殺害とその仇討に該当する箇所は、本作全十編のうち、第七・八・十編に集中している。記述の分量からしても、この三編のみの内容で「復讐」と題されるのは、納得がいきにくいという見解が生じているのであろう。そうした事情を踏まえると、本作の題が示す「仇討」には、伝内だけでなく、別の誰かのエピソードも含まれるとは考えられないか。

前述したが、作品終盤で、万字前が当初は父の仇討を意図して月小夜母子を滅ぼそうとしていたとわかる。万字前自身が語ったように、月小夜母子を陥れる計画は、当然正当化はできない。結局は、自身と子にその報いを受け、月小夜と子孫を滅ぼすことはできなかった。だが、その原点に位置する、不吉な出生でも我が子を捨てなかった親への恩義と、父の仇を討ちたいという執念は、伝内の仇討と内容的に拮抗し、作中で同様の比重があるものとして読まれたのではないだろうか。

また、万字前の告白は、演劇における「もどり」を踏まえた可能性がある。「もどり」は、人形浄瑠璃や歌舞伎における演出・演技の用語であり、悪人であったものが、実は善人であった場合を指す。善心に戻る、本心に戻るという意味合いでも考えられ、悪人である間に善心を覗かせることは「底を割る」といって戒められる[32]。菱岡憲司によれば、馬琴の読本には度々「もどり」が利用されており、最初期の例が『曲亭伝奇花釵児』（文化元年（一八〇四年）刊）であった。そのため、読本執筆を開始した当時から、意

識的にこれを利用していたことが指摘される。[33] 菱岡論が考察した作品の例では、多様なパターンが提示されている。『石言遺響』の万字前も、作者が「もどり」を使った人物の一例として見られるのではないだろうか。

「もどり」を利用した告白によって、悪女万字前は一連の悪事を振り返り、懺悔して息絶える。本作は、そうした同情を誘うようなあらすじを終盤に組みこむことで、悪人像の中に善人のような要素を含ませ、より複雑な構成を打ち出した作品だったのではないだろうか。

六　まとめ―引き継がれる悪女像―

本稿では、『石言遺響』に登場する万字前を中心に考察した。先行研究では部分的考察にとどまった「実子への執着」と「亡父の仇討」という悪事の動機について、本文全体から掘り下げる考察を行った。また、同時期の作品における悪人像と比較すると、万字前には、善人のような要素をもつ悪人像という複雑な造形が見られることがわかった。

本作は、この後に刊行されていく作品にも多様な影響力をもつ。万字前は、馬琴作品の妬婦像の初めとされ、後続の作品で、その人物像が引き継がれていった。[34] また、同時期の山東京伝『桜姫全伝曙草紙』の「野分の方」とは、共通点が多く見られ、関連性が強いことが明らかである。[35] 万字前の造形を再考することによって、後の作品に関する考察にも、影響を与えるところが大きいと考えられる。

注

(1) 横山邦治『読本の研究―江戸と上方と―』（風間書房、一九七四年）、濱田啓介「「勧善懲悪」補紙」（『近世小説・営為と様式に関する私見』、京都大学学術出版会、一九九五年）、大高洋司「京伝、馬琴と〈勧善懲悪〉」（『京伝と馬琴〈稗史もの〉読本様式の形成』翰林書房、二〇一〇年）を参照。

(2) 藤村作編『日本文学大辞典（増補改訂）』（新潮社、一九五〇～一九五二年）の「石言遺響」（笹野堅筆）、鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成』第一巻（汲古書院、一九九五年）「解題」を参照。

(3) 半紙本読本では『月氷奇縁』『稚枝鳩』（二作とも文化二年（一八〇五）刊）、中本型読本では『高尾船字文』（寛政八年（一七九六）刊）、『小説比翼文』『曲亭伝奇花釵児』（二作とも文化元年（一八〇四）刊）が挙げられる。

(4) 馬琴読本の悪女像については、中尾和昇の「悪女の造形―怨霊憑依と転生―」（『馬琴読本の様式』清文堂出版、二〇一五年）の論がある。中尾論では、「怨霊憑依」による「悪女化」が見られる『石言遺響』以降の作品を対象として考察する。

(5) 万字前の造形を詳細に論じた研究には、大高洋司「『優曇華物語』と『曙草紙』の間」（『京伝と馬琴〈稗史もの〉読本様式の形成』）、田中則雄「長編仏教説話と読本」（田中則雄『読本論考』汲古書院、二〇一九年）がある。大高論は山東京伝『桜姫全伝曙草紙』の「野分の方」と本作の「万字前」を比較し、田中論は仏教長編説話の観点から、『霊鐘山』の「万寿ノ前」と本作の「万字前」の比較を行った。本稿では、上記の研究を踏まえつつ、万字前の造形をより深く考察するため、本作と典拠において関連する記述を作品全体から精査する。

（6）　良政と月小夜の出会いは、月小夜が弾く琴の「秘曲」の音に誘われた良政が月小夜の家を訪ねるという場面になっている。

（7）　田中則雄「長編仏教説話と読本」を参照。田中論は、特に万寿ノ前の出自と性質に関する記述を重視する。本論の内容は、「因果応報―長編小説に内在する理念」（『読本論考』）にも同様の見解が示される。

（8）　改名の後は、本文で「鏨」とされているが、本稿では便宜上、「万字前」という名称で統一する。

（9）　『太平記』巻第十六「楠正成兄弟以下湊川にて自害の事」における「そもそも最後の一念によつて、善悪生を拽くといへり。」という一文がある（長谷川端校注・訳『新編日本古典文学全集　五五　太平記②』小学館、一九九六年）。馬琴が作品に『太平記』をよく利用したことは、後藤丹治『太平記の研究』（河出書房、一九三八年）に詳しい。この一文もそうした傾向を示すものか。

（10）　『仮名手本忠臣蔵』（寛延元年（一七四八）大坂竹本座初演）第四段に「湊川にて楠木正成．最期の一念によつて生を引くと言ひしごとく。」とあり、『妹背山婦女訓』（明和八年（一七七一）大坂竹本座初演）第三段にも「人間最期の一念によって輪廻の生を引くとかや。」とある（鳥越文蔵・長友千代治・大橋正叔・黒石陽子・林久美子・井上勝志校注・訳『新編日本古典文学全集　七七　浄瑠璃集』小学館・二〇〇二年）。

（11）　諸研究において、この一文に触れられることが多いが、本文と照らし合わせて、「生まれかわる」という解釈には疑問が呈される。本稿では確認のため、当時の用例を示す。

（12）　注4を参照。

（13）　注7を参照。

（14）　大高洋司「文化三、四年の京伝、馬琴と『桜姫全伝曙草紙』」（『京伝と馬琴〈稗史もの〉読本様式の形成』）を参照。大高洋司「『石言遺響』論」（東京大学国語国文学会『国語と国文学』五五号、一九七八年）でも、同様の点が指摘される。

（15）　本稿では、万字前が実子を溺愛する場面を考察対象として扱うが、大高洋司「『優曇華物語』と『曙草紙』の間」で、以下の内容も指摘される。第七編で、業右衛門の連れ子八五郎が、父親を自らの死でもって諫めようとする。八五郎が雪の夜に家を出ていく傍ら、万字前の「女児枝折をかき抱て、はやく臥房に」という記述がある。万字前の実子と継子への扱いの差が看取される一文である。

（16）　大高洋司「『優曇華物語』と『曙草紙』の間」では、万字前と、その影響を受けた『桜姫全伝曙草紙』の「野分の方」を比較しており、万字前については、「月小夜母子の忍従と信仰心の前ではどうしても陰の薄かった」「馬琴は、母親としての万字前の情愛を、とりたてて重要なものとしては描かない」とした。本稿では、後述する「四、馬琴作品における悪女」において、『石言遺響』以前の馬琴の読本に、万字前のような実子への執着心を描いた悪女はいなかったことを述べる。その上で、万字前は、馬琴の読本のうち、親子の情愛を主要な行動原理とする悪女像の、最初の例であることを示す。

（17）　『月氷奇縁』に見える「六田虔婆」は、仲介業を生業とし、主人公倭文の眼病治療にも貢献するが、倭文の妻に治療費を得させようと妾奉公を斡旋し、その仲介で得た金銭に喜ぶ描写が見られる。積極的に悪事をなす人物ではなく、万字前との比較には用いられないため、本稿では取り上げない。

（18）　ここで述べる登場人物については、拙論「『月氷奇縁』論―冒頭の〈冤罪事件〉に注目して―」（上方文藝研究の会『上方文藝研究』第二〇号・二〇二三年）、「『稚枝鳩』における悪人像―『優曇華物語』との関連性をめぐって―」（大阪大学大学院人文学研究科・文学部・大阪大学文学会『待兼山論叢　文学篇』五七号、二〇二三年）において、論じた。

(19) 中本型読本には、他に『小説比翼文』『曲亭伝奇花釵児』などの例があるが、万字前と似た特徴をもつ人物像が見られないので、本稿では扱わない。

(20) 『高尾舩字文』は、物語の途中で作品が終わり、作品末尾に後編は『水滸累談子』に続くとあるが、未刊に終わる。そのため、善人・悪人ともに結末が十分に描かれていない。

(21) 拙論「『稚枝鳩』における悪人像―『優曇華物語』との関連性をめぐって―」を参照。専は、『優曇華物語』の「野猪老嫗」に影響を受け、悪人に協力する悪女として描かれる可能性が指摘できる。「野猪老嫗」は、強欲かつ残忍な人物で、妊婦や赤子を殺害する。ただ、『優曇華物語』では、野猪老嫗の子どもは登場せず、その点で、専・万字前の造形とは異なる。

(22) 火叉が死体を奪う話は、神谷養勇軒『新著聞集』（寛延二年（一七四九）刊）の「奇怪篇　第十」の「葬所に雲中の鬼の手を斬とる」に葬礼に現れた鬼の手を斬った刀を「火車切」と名付けたとある（『馬琴中編読本集成』解題）。なお、この項は、死者が男性であり、専と共通する点は見えず、刀の由来のみ利用したと考えられる。同篇には「死骸雲に入り両足をたれ出す」に、火叉登場と天変地異の描写で類似の箇所がある。「殃禍篇　第十四」の「慳貪老婆火車つかみ去る」は、「世に火車といへる者の、悪人を掴とるといふ事のありし」との記述も見られる。馬琴が葬式の場面で、『新著聞集』を利用したとするなら、「火車」に関する複数項目を少しずつ取り合わせたものと考えられる。『新著聞集』本文は『日本随筆大成　第二期五』（吉川弘文館、一九九四年）を参照。

(23) 注7を参照。

(24) 注4を参照。

(25) 大高洋司「『石言遺響』論」において、「石言遺響」という題は、様々な「石」に関連した地名・伝承を題材とされたことが指摘されている。

(26) 『石言遺響』について、藤岡作太郎と後藤丹治は、『霊鐘記』の改作にあたる『狭夜之中山敵討』が典拠であるという見方を示す。その上で後藤は、『繡像復讐石言遺響』という内題から、「復讐」「敵討」という書名に共通点があるため、「種本」は『狭夜之中山敵討』であると考えている（藤岡作太郎『藤岡作太郎博士著作集　第四冊　近代小説史』（岩波書店、一九五五年）、後藤丹治『太平記の研究』の「石言遺響」に関する記述をまとめて参照した）。

(27) 横山邦治『読本の研究―江戸と上方と―』「江戸における仇討ものの解体―馬琴の仇討ものを中心にして―」を参照。

(28) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』（小学館、二〇〇〇～二〇〇二年）、国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九～一九九七年）、の該当項目を参照。特に、服部幸雄・富田鉄之助・廣末保編『【新版】歌舞伎辞典』（平凡社、二〇一一年）「仇討物（あだうちもの）」の項（服部幸雄筆）では、『曾我物語』を基幹とし、近世期以降に演劇や小説作品に仇討の趣向が広く用いられたとする。基本的に上下関係で、上の立場の者の仇を討つという発想である。

(29) 注26を参照。

(30) 横山は、この「注五」で、『日本文学大辞典』の笹野堅が執筆した「石言遺響」の項を参照し、笹野の見解をそのまま支持する。

(31) 注27を参照。

(32) 『【新版】歌舞伎辞典』「もどり」の項（藤田洋筆）を参照。

(33) 菱岡賢司「馬琴読本における「もどり」典拠考」（読本研究の会『読本研究新集』五、翰林書房、二〇〇四年）

(34) 注4を参照。

(35) 大高洋司「『優曇華物語』と『曙草紙』の間」を参照。野分の方は、万字前と同様に嫉妬に狂って悪事をなし、最後は雷死という結

末を迎える。万字前より悪人としての要素が強調されているとする。

引用文献

本稿の原文引用は次のものに拠る。

『高尾舩字文』…高木元「『高尾舩字文』―解題と翻刻―」（『説林』第四十三号、一九九五年）
『小説比翼文』…高木元校訂『中本型読本集　叢書江戸文庫25』（国書刊行会、一九八八年）
『曲亭伝奇花釵児』…徳田武・横山邦治校注『新日本古典文学大系80　繁野話　曲亭伝奇花釵児　催馬楽竒談　鳥辺山調綫』（岩波書店、一九九二年）
『月氷奇縁』・『石言遺響』…鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成　第一巻』（汲古書院・一九九五年）
『稚枝鳩』…鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成　第二巻』（汲古書院・一九九五年）
『優曇華物語』…山東京傳全集編集委員会『山東京傳全集　第十五巻』（ぺりかん社・一九九四年）
『小夜中山霊鐘記』…大久保正編『国文学未翻刻資料集』（桜楓社・一九八一年）、翻刻は内田保廣

※　本研究はJSPS科研費（課題番号：24KJ1562）の助成を受けたものです。

（いけだ・まきこ　本学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）